
End Roll とコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End Rollとコンティニュー

【Nコード】

N4559Z

【作者名】

タナカ

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというチャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きてるときに大きな間違いか罪を犯したようです。こちらは身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだか罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

気付いたら草原にいました。（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！特にチートな能力を初めからもっているわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました。

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囲まれた花畑に来ていた。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数えろ。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだつけ？ いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやってこの夢から覚めることか、だ。はい夢！ はいこれ夢！ むしろ夢じゃなきゃ困る。歩いててバスが突っ込んできて爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚める。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくつと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？ なんで俺声かけられてんの？ はは、まさかこれ神様っていうやつ？ ははは、まっさかー？

おそろおそろ振り返る。そこにいたのは軽そうなホスト風の男。シルバーアクセサリーを首やら手にじゃらじゃら巻いている。全体的にチャラ男にしか見えない。

よかった、お約束みたいな展開じゃなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言ってるんですかなわけないですよー。こんなの俺の夢に過

ぎないんですから。そうそう、夢じゃなきゃいけないんですから」

「現実逃避も甚だしいよー？ はっきりと事故の瞬間覚えてるんだから諦めな？ 人生諦めが肝心って言うじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりゃいいんだああっ！！！！！」

「まあドンマイ」

「うつぜえええええっ！！！！！！！！！」

きらり、と白い歯を見せてくる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かった。

「美少女の神様は今別件で仕事中的なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ…、あれ？ なんで今考えてることわかったんですか？」

「そりゃあ神様だもの」

「…だからこれはゆ」

「夢じゃないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思ってる？」

シビアなことを言われました。笑顔で、俺にとって全力的に絶望的なことを言われました。

「…本当に？」

「本当に」

「まじで？」

「まじで」

「…現実」

「まあ現実だね」

「……俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく」

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白昼夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買い物をするとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかという、理由は簡単。母親がいないためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残ったのは自分だけ。初めは姉がやっていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているの、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらてくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をしていて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れていく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かって突っ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかった。テレビのスイッチを切るように、俺の意識は途切れた。

回想終了。

「……」

「どう？」

「現実か」

「うん」

「……今日の夕食どうしよう？」

「混乱してるね」

親父達ご飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だろうけど材料あったっけ？ 確か米はあったからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういえば牛乳がなかった。姉貴は朝いつも飲むから買ってたないと思われんだよね、失敗した。豚肉とほうれん草はあったと思うから、豚肉のほうれん草和えが出来るかもしれない。卵も確かあったはずだ。なんとかそれで満足は出来……てほしい。

「……そもそも君もう死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの？ …俺としては早く説明に移りたいんだけどな…、
これからのことか」

「これからって…、俺に『これから』はないでしょうよ」

「そういうわけでもないんだよね…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？ 困った顔をしている自称神。どういうことだ？ と俺が問うようにじつと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかったんだ」

どうしてだかわかる？ と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろ
うね、と神は眉をハの字にして笑った。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪
を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それ
は生きていくうちに償われていくものだけど…、君は途中で死
んでしまった」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。

待って、待ってくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言う。俺はいた
ってクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなければ
学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつつち、そういうわけでもないんだよね…。大罪こそが人
の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかったのに、なんの因果か命を落としてしまった。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ」

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじゃん。悪いことした覚えもないのに…。どういうことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのさ」

「……は？」

間拔けな声二回目。

一瞬耳を疑った。何言ってるんだこの人。転生って…転じて生まれる？ はい？ ホワッツ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまったからね、違う世界で新たに生きていくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしわからないことがあったら教えにいける。なんてったって俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんですけど。ちょっと待て…、転生って…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふっ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さっきも言ったように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きているうちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまった…」

「あ、待てよ…？ もし、俺にそんな間違い？とかがあったとして、こうやって転生する必要があるんだ？ そこまでして、償う？ ……なんで？ 俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「そうさ、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさえ出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある」

そこまで真面目な顔で言ってから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑って俺を見た。

しやらしやらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいさ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出されること。新たな人生をエンジョイしようか！　みたいな感じでさ？」

「…かつるいな…」

「重くても困るっしょ？　まあ転生先なんだけどね…、ねえ君、フアンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「…は？　そりゃあ冒険者とかモンスターとか…」

「うん、つまりそこ行くの」

「……………は？」

「さってねー…それと…」

「待て。おい待て。すぐ待て。はい？　どういうこと？　今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」

「は…はい!？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにちゃんと読み書き完備だよ？　まあゆっくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！　え、俺そんなフアンタジーなところ行くの決定？　まじで？」

「まじでー」

「かつる!？」　俺のこれからの先の人生すぐかつるい調子で言わ

れた!？」

「いや、こういうのはノリで突っ走っちゃった方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええっ!？」

こいつ恐らくすっげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがった!？本当に神様がこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…?」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思ったら大間違
いだからね?」

「どちくしょうが!！」

そうだよな！ そんなご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！

「君の目的は自分の過ちに気付くことだからね…、もし気付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか」

「…なんだよそれ」

「そもそも世界と言うのは別次元のようなものだからね。早い話三
次元と二次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が二次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もう説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていくことを逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかさ、君もともとスペック割と高くない？ ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強く、勉強はそこまで出来るわけじゃあないけど頭の回転は速いし。本当リア充爆発しろとか思われてるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか」

「…」

「…そういうわけでもないよ？ 俺は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？ そもそも世界自体が違っただよ？ 星が違っとかそんなんじゃない、そもそも次元が違う。つまりさ、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だってまったく違う。魔法だって飛び交うし、剣も交じり合う。そうさ、君にとっての異世界なのだからね」

「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だってわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だってある」

「…」

「…どうしたの？ さっきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言ってるけどさ、結局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「…、うん」

「どちくしょうがあああああつ！……！！……！！……！！」

自称神が言うには、言語能力と魔力核だけはあちらと同一のものと

する、らしかった。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということでの魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしれないし、普通の人と同じようになるかもしれない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知ーらねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾に をつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけど。

「まあ、そろそろお話も終了かな？ さて、君を違う世界へと転生させるよ。…あ、面倒くさいからこのままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そうそう転生してくる人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

目覚めたらやはり異世界。

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなっていく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなっていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと感じた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつんとリモコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、親父も姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろう』と。

…守れてねえじゃん。俺死んじやったじゃん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するようになった。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思っていた。

親父は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあった。けれどそのたびに体が強化されていつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしいどこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度か迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。どここのフラグメーカーだ。まあ、親父は母親一筋だったらしいけど…、

って話逸れた。

つまりそんな親父の様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。親父みたく、家族を守るように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやった。…最近はおもしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに親父を見習って、少なくとも変な輩からは大事な人を守るように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れたけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入っていた。ここだったら運動も出来るし、走ることでいいしそこまでお金もかからないと思っただからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなく走ってただけなのになぜだ！？ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言っていた高スペックというのは、全て家族のために頑張ったものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありえますか？ 今頃親父と姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていってしまったし、もう守れない。そう思うたびに泣きそうになった。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなのだ。親父、姉ちゃん、死んじやってごめん。

自称神が言っていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だってそうだろう？ こないつつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、親父達の元へと生まれることは出来ないと思うけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあったのだ。

死んだ母親のぬくもり。親父達の笑顔。友人達との騒ぎ声。

今考えると、それはとても大事なものだ。早く、早く帰りたい。

帰りたいんだ、俺は。

⌈
⋮
h
?
⌋

目を開けたらそこは、先ほどまでいた草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。

ざわざわと、普段は聞きなれない森のさざめき。空気も澄んでいて、息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだった。

…ビバ・異世界。

はいはい俺落ちて着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ちて着け落ちて着け落ちて着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸って、吐いて、吸って…、ほら、気分が落ちてきてきただろう？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…、

「どこだこはあああああ！……！！！！！」

「……………」

「……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通感覚ならこうなってもおかしくないはず。」

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱ現実……？」

試しに頬を抓ってみた。痛かった。現実であり夢じゃない。

自称神に言われてたことだったが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。

見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。

「まじでか。」

うわあああ……と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのときに、ふともぞり、と動くものがあるのに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

「……え、モンスター？」

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言っていた。でも、いきなり？ 俺倒せると思えないんだけど？

ぎぎぎ……と油の差してないロボットのようになり替えると、そこには白い着物のようなものが見えた。

「は……？ 人……？」

気を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで……、狩衣、と言えがいいのか？ つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。

その瞬間、自称神の言っていた言葉を思い出した。

——転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。

多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、下のほうで縛られていた。

…日本人、なのか？ この衣装は和風っぽいんだけど…。

そう考えていると、その狩衣を纏った人間の瞳が、開いた。

「こんにちは」

「……？」↑状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？ こういう場合は」

「……」↑考え中。

「お前もあの自称神に会った？ あのチャラそうなの」

「……??」↑混乱中。

「ところでここ異世界なのかな…、見たところお前も転生してきた人間だよな？」

「……！」↑思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすつか…お前戦える？」

「……っ！！！」↑思い出した。

「…どした？」

「ここ本当に異世界！！！？」

「あ、やっぱりお前俺と同じか」↑平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうときコミユ力大事。…あれ？ 違う？ まあなんでもいいが、似たような人がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘…本当に来たんだ…。これは、喜ぶべき…？ いや、悲しむべきということ…？」

「おいお前なんていうの？ 名前」

「え、へ、な、名前？ て、ていうか何でそんな落ち着いてられるの…」

「いやさっき散々驚いたけど…」

そりゃあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。

見た目ではあまり見分けがつかなかったがどうやらこいつは男らしい。瞳は俺と同じく黒色だった。なんだ、普通に日本人っぽい顔立ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？ …俺はそんな名前じゃないよ、忌月^{きげつ}、それが俺の名」

「…日本人じゃない…？ 苗字は？」

「苗字？ そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶^{かや}の国、列峰^{れっほう}領の治める…」

「もういい理解した」

こちらと違うファンタジーなのか。

目覚めたらやはり異世界。（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出会いました。

「…それで、これからどうしようか」

忌月と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてるうちにどうやら同年だったということがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のことを話し合おうと口を開いた。

「あのチャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちゃ、ちゃらお？」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様？ 神様は女だったよ？ しかも綺麗な人だった」

「…なんですと!？」

「ま、まじで!？」

「え、食いついてくんの!? あ…ああ、なんか『別にあんたのためなんかじゃないんだからね!』って言われた」

「つ、つつつつつつツンデレ…だと…!!! 俺のところはあの自称神とかいうチャラ男だったのに!? 理不尽だ!」

「あれ? でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか…。まさか…」

「お前か! お前の方が! お前の方に行ってたからこっちに來なかつたのか! 謝れ! 全身全霊をかけて謝れ!」

「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒ってんの!？」

「ちくしょう…! 俺だって美少女の方が良かったさ…! あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよと言われて腹立たないとかおかしいだろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気に入らなかつたわけだ…、って俺に八つ当たりすんな！」

「しなくちゃこの荒ぶる気持ちが抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実習のときに女子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだして、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃない？ と褒められて、女子には先ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。これでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もつと女子と…」

「しっ！」

さらにいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。はあ！？ と思わずその手をとろうとしたが、どうにも忌月の様子がおかしかった。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だった。イコールそれは周りに響くというわけで。しかも、この世界は、ファンタジー。言ってみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……っ！」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すなんてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がっていく。

ちくしょう、気付くべきだった。ここは異世界。ここのルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだからだ。…言い訳になるな、これ。

がさがさところちへ近づいてくる音がする。それは確実にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えてる。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見ると、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄って来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファントジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち&身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない少女？

は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしはそういうことに偏見など持たん、邪魔して悪かったのお…」

…ん？

ちよつと待て、俺達の今の体制を確認してみよう。

俺↑先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌月の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌月↑茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちつがああああ——うー！俺はそんなアブノーマルな趣味持ってません！違います！本当に違います！」

「は、え？あ、あぶのーまる？なんだそれ？」

「…なに？おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは…？」

「そんなことあるか——！！俺は女の子！女の子が好きなんです！」

「そう叫ばれても困るのじゃが…」

「ごめん俺理解できてない。誰か説明して」

さっぱりわかってない忌月は置いて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわかんないし、ここらへんに家ってないか？」

「わからない…？…ううむ…、おぬしら、わしのことわかっておるか？」

「ん？なにが？」

「わしはこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゃぞ？」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ…」

「あ？」

「握手を！」

「……」

あれ？ 俺なに言ってるんだ？

…なに言っちゃってるんだ！？

…なに言っちゃってくれちゃってるんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女っ娘とか考えてないです！ 違います！ 萌えとかそんなのと違いますから！」

「…違うのか？」

…ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がつてるとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればここどこか教えてほしいんだけど…」

「お嬢さんではない…。ん？ …なにやらおぬし、ぽっかり抜けたような力があるな」

「え、わかります？」

「…なんの話だ？」

話に入ってきた忌月を見たウェイブは、なにやら変なことを言う。

それをさらに受け止め、むしろ理解してるような口調だ。

訝しげに見ていたのに気付いたのか、忌月が慌てて俺に教えるように言った。

「俺、死ぬ前は霊媒師だったんだよ」

…… なんですと？

魔女と出会いました。(後書き)

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

同じ転生者は霊媒師。

「れ、霊媒師？　霊媒師って…、あの、霊とかなんやら被うやつ…？」

「そうだけど…君の世界にはないの？　俺のいたところじゃ、一般的な職業だったんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い！？」

「さ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思っても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないのだ。

それに忌月だって俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまったくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じゃないと。

それにどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているように見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おっと話がずれた。

「まあ、そういう『霊力』ってのが俺にはあつただけど、この世界に来るときにはすっぱり抜けたってわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしょうがないとは思ってたんだけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどっちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとって異質なものはない

ほうがいいだろう。目立ってもしょうがない」

「違う世界…？　やはりおぬしらこの世界のものではないのか？」

「え」

「え」

「…なんじゃその反応は」

「いやいやいや世間話のように言われましたよウェイブさん。俺と忌月は顔を見合わせる。」

「…わかるもんなの？　そういうの」

「普通の人間にはわからんじやろ。時間がたてばおぬしらもこの世界に染まるじやろうが、いかにも臭いが違う」

「に、臭い？」

「昔にもそういうものがおったからのお…、150年くらい前じゃろうか…」

「ひゃ、ひゃくごじゅうねんっ！？　お前いくつだよ！」

「ん？　今年で324歳になるの」

「…っ！？」

なんてこつたい。300歳越え…だと…？　確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？　まじか？　まじですか？

ちなみに忌月は、「だからそんなに口調なのか…」とかなんやら言っている。突っ込みどころがずれてるぞ。

「まあかなり珍しいことには違いなからな。特にその黒い目はあまり見かけん」

「やつぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりいど…？」

「そうじゃな。まあかといって珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？　…立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家にも来ぬか？　この世界のことを教えてやる」

「本当！　助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前力タカナっばい言葉苦手だよな」

「かたかな…？　な、慣れるから！　そのうち慣れるから！」

忌月と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはあの自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違ったり、容量が違ったり、属性が違ったり…、ちなみに属性と言うのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合った属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合った、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず忌月に尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食ってたわけだし…、君のところじゃそういうのなかったんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女の人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかったのか！？」

「な、なんでいきなり怒るんだよ！」

「うるさいのう…、静かにしとらんとモンスターが襲ってくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけけど、どうも年が食い違ってるように見える。

なんとなくそう思っているとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通。

魔女の家、といって、少々身構えていたのだが、そこはどうにもイメージと違って小奇麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあったのだが、壺は中身は入っておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だった。けれどもちゃんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のような。ウェイブが普段使っているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こっちじゃ、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだった。いや、日本と比べてはどことなく昔の外国？ ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座って待っておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こうちゃ…？ お茶、だよな？」

「なに言ってたんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやって座るの？ 畳とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるようだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たようなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

畳と言ったけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろつか…、服装だってやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書

でしか見たことがないんだけども。

ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に畳だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名称は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そういえば聞いてなかったけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなって」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじゃないよ！　え、えんど…？　だっけ？　そっちはどうしたの？」

「エンドってなんだよ俺終了しちゃってるじゃねえか」

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかったかもしれない。

「俺はトラックが突っ込んできてそのうえ爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりゃ…」

「食い違ってる気がするけど気にしないでおこっ」

カタカナはそのまま伝わっているわけか…、なんか言語能力があつちよりこっちのが高性能…？

『それは俺が有能だからだよー』

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確実に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝ってって言ったら手伝ってあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なことやってんのよ! ベ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あんたの方が、仮に性能が良かったとしても、その、違って…で、出来なかったわけじゃなかったんだからあ!』

『うんわかってるよお、だからほら、泣かないで』

『な、泣いてないわよ! か、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だったみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言っておくが俺はエンドじゃねえ。終了してねえから」

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言ってるから結局エンドになっちゃってるじゃねえか!」

人生終了して名前も終了ってか! 不吉じゃねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらも聞けい、ほら」

「…サンキュ」

「…この取っ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、

俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言う名じゃ。それでここは深海の森。この近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらはギルドに登録するがよい」

「ぎんど…?」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」「わかるのか…? まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじゃ。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じゃな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるといのが一般的じゃ。簡単なものからそりゃあ難しいものまで山ほどある。そのどっちともに料金はもらえるからの。生活には持つて来いじゃ」

「仕事って、どんなのがあるんだ?」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじゃ、料理人募集のようなものもあるのう」

「料理! まじか!」

「そ、そんなキラキラした目で食いつくところかの…?」

料理なら持つて来いだ! 試行錯誤を繰り返して作り上げた究極の味噌汁からフグの調理(こつそり獵師さんにもらった本体丸々)を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度も就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人にさえ感激させた。俺ははっきり言える。料理の腕だけはチート級だ。…まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じゃ。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんのう」

「え、そういうのわかるのか?」

「わしは魔女じゃぞ？　そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと言うか…もともと合った『なにか』のせいかな魔力の質が特異じゃな。それにぽっかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのを望めるぞ？」

…なのに貧弱じゃ。限りなく体力がないうえ力もない。走っただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？　人の気にしてるところ突いちゃった感じじゃなく抉っちゃった感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まってる」

「え、そんなヘビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。…それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきておる。総合すると、まあぶつちやけ——あんま平和じゃない的な？　…ということじゃ」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやっておられん。まったく人間というものはどうしようもないものじゃ。今も魔物は増えてきておるというのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亜人やら獣人やらごっちゃか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん…戦争が始まったのは五十年ほど前、魔物は増え始めたのは百年ほど前じゃの」

「数年じゃねえ…、」

「戦争なんて下らんことしとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組めばいいと思うのじゃ、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「そりゃあ当人達にとつちやくだらないもんじゃないからなんだろうよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんなが掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからさ」

そんなことをなんともなしに言つたら隣に座っているいつの間にか生氣を取り戻した忌月が目をぱちぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「へえ、それは素晴らしくイケメンなんだろうな」

「いけめん？ …麺？」

やばい、だんだんこいつの言動面白くなってきた。

魔女の家は案外普通。(後書き)

アストウリアス (伝説曲) (西語: Asturias) (Leyenda) 》は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、《旅の想い出》作品71の第1曲、前奏曲「伝説」(西語: Leyenda) として書かれた曲である。

《イベリア、12の新しい印象(フランス語: 12 nouvelles impressions) 》は、イサーク・アルベニス最晩年のピアノ曲。

Wikipediaより。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Rollとコンティニュー

2011年12月20日19時54分発行